

特別支援教育の理解啓発事業(令和5年度)

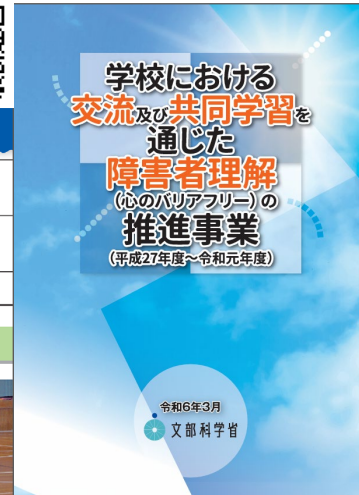


概要

交流及び共同学習の更なる推進のため、平成27年度から令和元年度までの期間に実施した「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」の研究成果や事業終了後の普及状況等について、実践事例集として取りまとめました。

リーフレット

各年度ごとのテーマについて教育委員会の取組事例をまとめ、文部科学省HPに掲載



交流及び共同学習の意義

「交流及び共同学習」の展開

小・中学校、高等学校等で交流及び共同学習を実施する際には、学習指導要領等を踏まえ、教育課程上の位置付けやねらいなどを明確にし、学校の教育活動全体を通じて、計画的、組織的に、適切な評価を行うことが必要です。また、障害のある児童及び生徒と障害のない児童及び生徒と一緒に参加する活動は、相互の触れ合いを通じて豊かな人間性を育むことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面があり、この二つの側面を分かちがたいものとして捉え、推進していくことが重要です。

小・中学校等で交流及び共同学習を実際に推進していく際のおおよその手順は下記の通りです。

1 関係者の共通理解

学校、子供たち、保護者等の関係者が、交流及び共同学習の意義やねらい等について、十分に理解する。

2 体制の構築

校長のリーダーシップの下、学校全体で組織的に取り組む体制を整える。

3 指導計画の作成

交流及び共同学習の実施、事前の準備、実施後の振り返りについて、年間指導計画に位置付け、計画的・継続的に取り組む。

4 活動の実施

- ・事前に、活動のねらいや内容等について子供たちの理解を深める。
- ・障害について形式的に理解させる程度にとどまるものにならないよう、子供たちが主体的に取り組む活動にする。
- ・事後学習で振り返りを行うとともに、その後の日常の学校生活において、障害者理解に係る丁寧な指導を継続する。

5 評価(※)

- ・活動後には、活動のねらいの達成状況、子供たちの意識や行動の変容を評価し、今後の取組に生かす。
- ・活動直後の状況だけでなく、その後の日常の生活における子供たちの変容をとらえる。

※交流及び共同学習のねらいがどの程度達成できたのか、活動を通して相互理解がどのように進んだのかなどについて具体的に評価するとともに、教育課程上に位置付けた各教科等の目標に照らして、どのような資質・能力が身に付いたかを評価し、その評価を次の活動に生かし、必要な改善や計画の見直しを行うことが重要です。

参考

交流及び共同学習の実施に当たっては、下記の資料や通知も参考にされるとよいでしょう。

「交流及び共同学習ガイド」
(平成31年3月改訂)

交流及び共同学習の実施に当たって、その意義・目的や展開、取組事例を学校や教育委員会向けに紹介した参考資料



「特別支援学級及び通級による指導の適切な運用について」(通知)
(令和4年4月27日)

交流及び共同学習の実施にあたり留意すべき事項について各教育委員会等が発出した通知



交流及び共同学習の展開

障害者スポーツを通じた交流及び共同学習(障害者スポーツの体験学習): 宮崎県

実施内容(下欄の取組について本ページで紹介します)	障害者スポーツを通じた交流及び共同学習 文化・芸術を通じた交流及び共同学習
交流及び共同学習の実施形態	特別支援学校と高等学校との学校間交流
障害種	聴覚障害、肢体不自由、知的障害

継続的な障害者スポーツの体験学習を通して深まる交流

障害者スポーツを通じた交流及び共同学習では、特別支援学校と高等学校の生徒が、ゴールボール、フライングディスク、ボッチャ等に取り組みました。

ゴールボールに取り組んだ例では、特別支援学校(知的障害・肢体不自由)と高等学校の生徒が合同チームを組み、ゴールボールを経験している特別支援学校の生徒が高等学校の生徒をリードしながら進めたり、移動等の介助が必要な生徒の支援を高等学校の生徒が行ったりするなど、活動の中で互いの理解が深められました。

フライングディスクに取り組んだ例では、特別支援学校(聴覚障害)の教師が高等学校の生徒に事前学習を行い、生徒間での手話を通じた交流を行いました。また、特別支援学校(知的障害・肢体不自由)と高等学校との交流及び共同学習では、全国障害者スポーツ大会に県代表として参加している生徒のデモンストレーションもあり、特別支援学校の生徒の活躍を周知する機会になりました。



ゴールボールに取り組む様子

工業高校の生徒が心をこめて障害者スポーツの用具を製作

特別支援学校(肢体不自由)とボッチャを通じた交流及び共同学習を行った工業高校では、障害の特性を理解したうえで、障害のある生徒のために何ができるかを考え、障害のある人が使いやすく、便利な製品を作りたいという気持ちから、特別支援学校の生徒がボッチャで使用する用具(ランプ)製品を工業高校の生徒が生み出しました。このような取組は、学校の特色を活かした交流として、新聞記事やテレビ番組でも紹介されました。



工業高校生が制作したランプでボッチャ体験



生徒達が一緒にボッチャの用具を組み立て

事業終了後も県独自の事業として続く取組

新型コロナウイルス感染拡大の時期を乗り越え、令和3、4、5年度と、宮崎県の事業として心のバリアフリー推進事業を継承しています。事業では、すべての高等学校で高校生が主体となり、特別支援学校の美術の授業に参加して作品を共同制作したり、ICTを活用した交流企画等を実施したり、文化祭といった行事等で双方の生徒が互いの学校を訪問し、相互に交流を深める機会を設けたりするなど、特別支援学校との交流及び共同学習を継続しています。

交流及び共同学習の取組例(9例)

交流及び共同学習をきっかけとした特色ある取組等

事業終了後の取組状況等

参考資料の紹介